
A.O.G -Agent Of God- ~代行者は旋律を奏でし者《おに》~

反省猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A . O . G - A g e n t O f G o d - ～代行者は旋律を奏でし者～

【Zコード】

N7192N

【作者名】

反省猫

【あらすじ】

今度の主人公はいきなり死亡！？ そんなある意味ついてない主人公が今回は音楽をテーマに軽音部の仲間達やいろいろな作品とクロスオーバーする物語。いざ、開演です！

この作品はけいおん！の一次創作小説です。

オリ主最強・チート・バグ・原作ブレイク・キャラ崩壊苦手な方にはおすすめできません。

それでもいいよという方は、暇つぶしにどうぞ～

第0楽章 『邂逅そしていきなり死亡！？』 1／5改訂版（前書き）

ところで、この事で今回は、けいおん！など色々な作品とクロスします。
そしてまた新たな主人公が物語の渦中へと身を投げます。
それでは新たな話の幕開けです！ どうぞ

？？

『問おう、貴方が私のマスターか？』

桃李

「……なつ……な」

俺は、某聖杯戦争でお馴染みのある場面に直面しているのだが……

？？

『うん？ 聞こえなかつたか？ 貴方が私のマスターか？』

桃李

「なんで……なんで……」

本来なら桃李に【騎士王】が登場する場面で……

桃李

「なんで、喋るギターなんだよおおおお……」

俺の目の前で聞いかけている存在……【騎士王】といつ英靈とかではなく……喋るエレキギターだった。

遡る」と、数分前

何はどうもあれどりあえず、俺の自己紹介をしようか。

俺の名前は、山彦

やまびこ

桃李。

市立一見学園に通う普通の男子高生だ。

俺の家は代々、多聞神社の神主をしている。

なので、将来はこここの神主になるんだろうと思つていて。

だが、たまに俺の将来これでいいのかと思つてたりもある。

まあ他に夢もないし先の事はわからないが……。

横道に逸れたな。

俺が学校から帰ると親父が俺に倉庫の整理を頼まれたので、それをしぶしぶ了承し、

倉庫の中を片付けていると、いきなり見知らぬいや聞き知らぬといつたほうがいいか

そう声が倉庫中に響いた。

???

「誰か 私の声が 聞こえる者は

いないのか?」

桃李

「ん?? 誰だ今のは?」

桃李が倉庫の中を探すがそれらしい人物は見当たらないといふ

今ここにいるのは自分だけのはずだが……と首を傾けて考へていて

また声がする。

？？？

「私の声が聞こえるのか？ 私はここだ…」

よくよく聞いてみるとあるアニメのキャラの声に似ている。

桃李

「（えーと…なんだつたかな…あ、そうだ！ Fateのセイバーの声に似てるんだ！）」

そう思い出した瞬間、ある光景を思い出す。倉庫、川、ヴォイス、倉庫の床には魔法陣らしきもの、

桃李

「（これはもしかして、もしかするとセイバー出現フラグキタ（。。。）…って状況じゃないか？）」

俺はその事に心踊りながら声のする方へ向かつとそこには

かなり古い青いエレキギターが置いてあった。

桃李

「アルエー、セイバーは？」

桃李がセイバーの姿を探すが見当たらない。

桃李

「…やはり、そうだよな。現実に起こらないよな。となるとあん

な幻聴が聴こえるなんて
俺疲れてるのかな？」

桃李がガツカリしていると、またあの声がする。

？？

「ん？ 何を落胆しておるのだ？ 私なりにこなれ？」

桃李

「…」じにじにじて、ジににも居ないじゃないか！」

桃李がそつ叫ぶと先ほど声が呆れた感じで、

？？

「バカ者、お前の目の前にいるだろ！」

桃李

「田の前つて…え？え？えええええええ！」

桃李は驚いた。先ほどの古いギターからあの声が聴こえてくるのだ。

？？

「やつと氣付いたか、バカ者。まあいい、それでは問おう、お前が
私の奏者か？」

そして回想が終わり最初の所に戻る。

？？

「まあ、ここの姿は先代の趣味だな。気にするな。私の名前はヴァイ
シユラヴァナといつ。

「山彦では毘沙門や多聞と言えばわかりやすいが。……それでも前の名前は？」

桃李

「山彦 桃李だ。多聞つて……。もしかして家の神社に祀つてあるあの？」

多聞

「ああ、その通りだ。といつても私は分身のほうだがな」

桃李

「分身つて……。ちよつと待てよ。今すゞい状況なんじや……」

多聞

「やつとわかつたのか、一応神だ。崇めてもいいぞ」

桃李

「まあ、それは置いとくとしてそれよりわかつたと云つた奏者つてなんだ？」

多聞

「奏者とこつのは、悪しきモノや不淨なるモノを清めの音で浄化する者の総称だ」

桃李

「なるほど、それはわかつたが俺が奏者つて間違いじゃないのか？」

多聞

「間違いじゃないぞ。お前からは奏者の力が出ている。まあしかし、

まだちゃんと覚醒してないのだろうな。物凄くわずかな量の力だ。
まあそれは今後おいおい覚醒するだろ?」「ん

桃李 「ふーん、俺の中にね~。と言わてもまったく実感ないんだけど
な」「

多聞 「とりあえず、私を弾いてみる。そつすれば分かるさ

桃李 「お前を? とりあえず弾いてみるか…」

桃李は半信半疑だったが、多聞の言葉を信じ、多聞を弾いてみる事にした。

すると

ギギギギ…ブチン!!

ギターの弦が切れてしまった。

多聞

「な、なんだと!?

多聞は絃が切れた事がよほどショックだったようで大声で叫んだ。

桃李はヤレヤレといった感じで

桃李

「…まあ古かつたからな。仕方ない新しい絃に張り替えてやるよ」

桃李がそつ多聞に言つと

多聞

「すまない。かなりの年月ここに置かれてたんで自分が古くなつたのを忘れてた…」

桃李は多聞を抱え倉庫から出よつとした瞬間、

ブサッ！！

桃李

「…え？」

多聞

「なつ…」

桃李はゆつくりと自分の心臓辺りを見ると蛸の足のような軟体動物の…俗に触手が、

桃李の心臓部と多聞を貫通していた。

桃李はギギギッと音がするような感じで後ろを振り返ると、

白いハットに丸型レンズのサングラスをかけた痩せ細つた感じの男がいつの間にか桃李の後ろに立つていて。

よく見ると男の右腕は人間だったが、左腕は先程みた触手になつており、

これをやつた犯人というがすぐにわかつた。

男は口元に笑みを浮かべ、

男

—悪いな、奏者は一人残らず消せと俺の上命が言ったんでな」

桃李

男

「これが死んでいくサニーに名乗り理由はねえーよ
しゃーな

そういうと桃李を触手で滅多刺しにし、桃李の全身から血が一斉に吹き出し、

多聞

「桃李！ き、貴様あ！ まさか奴らの！」

バキッ！！

多聞も真っ一つにされ、地面に落ちていった。

ドサッ！！

桃季はそのまま意識を失いその場に力なく倒れた。倉庫の床は血で真っ赤になっていた。

男は桃季と多聞に背を向け、

男

「さて、次はあのセカイへ行くとするか。クツクツク」

男を低い笑い声を残しその場から一瞬のうちに消えた。

それから1分後、不思議な事が起きた。二人が倒れた場所に無数の光が現れ、

力尽きた桃季と真つ一つにされた多聞を無数の光が包み込んでその場から消えたのだ。

一体、二人はどこに連れて行かれたのだろうか…それは次回、話すとしよう。

to be continued...

作者・桃李「といつ」とで、作者と桃李のあとト――――ク――」

作者「 」という事で、始まりました「『A.O.G - Agent Of God - 』代行者は旋律を奏でし者』』

四三

桃李一ちよこと待て
なんていきなり俺死んでんの！？

作者「それはね、君にある能力を付加する為だよ」

桃李「なるほど……つて納得できるか！――！」

作者「まあまあ、落ち着いて」

桃李一落ち着けるかつつーの！死んでるんだよ俺はー！」

作者「まあ、怒っている主人公を横に置いといで」

桃李一置いとくなよーー」「

作者一主人公の簡単ナロフィールのナロ、という事で、まずは主人公の『山彦 桃李』の簡単なプロフィールを

「プロファイル?」

名前：山彦
やまびこ
桃李
とうり

年齢：17歳

趣味：漫画 ゲーム ギター

好きな物：カレー

嫌いな物：外道 グリーンピース

見た目：黒髪で肩まで伸びている髪を後ろでゴムを使い束ねている。

目は切れ長。顔はイケメンの部類に入る（上の中）

CVイメージ：宮野 真守（DOG DAYSのシンク・イズミ
(役)

あるセカイの高校に通う17歳の青年。性格は、面倒見が良く、

いろんな人に好かれる。恋愛方面は普通。鈍くもないし鋭くもない。

中学のときからギターをやつており、結構な腕前。

両親は、海外に出張中。

作者「プロフィール完全版は今度書きます。多聞のプロフィールも
その時に。」

「とこう」とで、次回予告よろしく～

桃李「謎の男により殺された俺と真つ一つにされた多聞はとある人物により復活するが、その人物から
驚きべき提案をされることになる次回、第1楽章『代行者
は奏でし者』」

作者「という事で、次回またお会いしましょ～」

作者・桃李

「ではまたな～」

作者

「～」意見・～」感想お待ちしております～」

第1話　『代行者は奏でし者』（前書き）

いきなり死んだ主人公桃李と多聞の二人。謎の光によりどこかに飛ばされたが……そこは一体。
というかバレバレの展開ですね（@_@;）
それでは第1楽章をご覧ください。どうぞ～

第1話『代行者は奏でし者』

？？

「桃李… 桃李…」

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえる。

俺は目を開ける事にした。

桃李

「うん…… ?? 」
「一体? 君は誰?」

桃李が目を覚ますと見知らぬ白い空間と見知らぬ黒髪の女性がいた。

??

「ああ、『』の姿では初めてだつたな、私は 多聞だ」

多聞と名乗った女性の容姿は、まんま Fateのセイバー【英靈アーサー＝ペンドラゴン】の髪の色を黒くし、

肌の色も小麦色になつたような感じだ。はつきりいつて美人である。

桃李

「多聞だつて！？」

桃李が自分の容姿を驚いた事が気に入らなかつたのか。

多聞

「むつ… そんなに驚くことはないだろ？！」

多聞は頬を膨らませ怒っているがその仕草が、

桃李

「（か、 可愛い／＼／＼）」

そう思った瞬間、桃李の顔が赤くなる。

それを見た多聞は訝しげに桃李を見ると

多聞

「どうしたんだ？ いきなり顔を赤くして？」

桃李

「いやー、多聞の仕草があまりににも可愛いかつ……あ

桃李がしまつたといつ顔をすると

多聞が頬をうつすら赤く染め顔を背け、

多聞

「か、 可愛いなどと／＼／＼」

桃李

「（いや、 真剣可愛いんですけど、 お持ち帰りしていい？ あ、 や
っぱだめ）」

などを考へてみると横から

？？

「あのー、そろそろ話いいですか～？」

そう言って、二人の間に金髪の女性が話に割つて入った。

桃李

「うわあ～！」

多聞

「お、脅かさないでください、ルカ様！～？」

二人が慌てたのを見て金髪の女性は微笑むと

？？

「うふふ。はじめまして山彦 桃李さん。私は第1級多世界管理者
ルカ＝ツヴァイト＝ルミナスと申します」

桃李

「えーと…」

ルカ

「ふふ、そうですね～貴方のとこりで言つと“神”ですかね～そん
な存在です」

それを聞いて桃李が驚く。

桃李

「か、神！？」

ルカ

「ふふふ、はい～」

多聞

「ちなみに私の上司よりかなり上のお方だ。失礼の無いようにな」

桃李

「で、その神様が俺に何のようですか？」

レ
カ

「はい、それなんですが～その前に一つ言わなければならぬことがあります」

1/16

「はい、なんでしょう？」

「貴方は一度死んでいます」

一瞬、その場の空気が凍つた。

「死え？」

ル
力

「はい、貴方は一度死にました」

桃李

多聞

「真剣だ。ル力様の力で死んでいたお前を生き返らせてもらつたの

だ

桃李

「それでかつ！ おかしいと思つたわ〜、死んだのならなぜ今ここにいるんだと」

ルカ

「それでここからが本題なのですが、桃李さん、神の代行者になりましたか？」

桃李

「はい？」

それから俺はルカさんとやらに神の代行者がなんなのかを説明してもらつた。

神の代行者については、A・O・Gシリーズの真剣で代行者に恋しなさい！ 参照で

桃李

「なるほどな〜、そう言えば俺を殺した奴は一体何者なんだ？」

ルカ

「それは、私たちの敵のネガ・マリスに生み出されし“怠惰”の使徒アケディア＝S＝ベルフェゴール

の部下の一人フォルネウスそれがやつの正体です」

桃李

「フォルネウス…。やつは今ビート?」

桃李が真剣な表情でルカに聞くと

ルカ

「はい、やつは今そのセカイの奏者を狙ってそのセカイに向かっています」

桃李

「そのセカイとは?」

ルカ

「【けいおん】と【けいおん】アーネの設定によく似たセカイと言えばいいでしょうか」

桃李

「【けいおん】? どんなのかは知らないけどとりあえず代行者の件受けれるよ。
で、俺はそのセカイに行けばいいのか?」

ルカ

「はい、そうです。では行くに当たって希望する能力を言ってくださいね」

桃李はルカからそう言われ、考えると

桃李

「うーん、そうだな」「

桃李が希望した能力は以下のとおり

？自分の中にある奏者の力の覚醒

？音楽連の技や術。

？仮面ライダー響鬼のよつたな鬼化（それにより音撃が可能に）

？身体能力成長限界無し（どこまでも鍛え上げることが可能。しかし、体の感じは細マッチョ的な感じで）

？音楽の才能

桃李

「これだけでいいっす」

ルカ

「なるほど、その能力 + あんたにはある能力が追加されます」

桃李

「ある能力?」

ルカ

「能力名は
直死の魔眼」

それを聞いて桃李はびっくりする。

【直死の魔眼】

ありとあらゆるものには発生した瞬間から予め決まっている崩壊の時期つまり死期が内包されている。

そしてこの眼を持ったものはその“死”といつ情報を【線】という形で視ることができる。

その為、外的要因や魔術的要因も全て無視してありとあらゆる対象を殺す事ができるということだ。

桃李

「なつ……なんでそんな力が！」

ルカ

「一度死んで復活した時に貴方は無意識的に死を理解してしまったのでしょうか？」

桃李

「俺はこんな力いらないぞ！」

ルカ

「……ごめんなさい、その力は外すことは出来ないの。その代わり、自分の判断でON/OFF出来るようにしておきますね」

ルカが申し訳なさそうにうつうつと桃李がしぶしぶ^{アレルギー}を承する。

桃李

「……わかった。そうしてくれると助かる

ルカ

「では、能力を付加しますね（一応、七夜の体術も使えるようにしておこうかしら。）

何かがあつた時のために。それと魅力を最高値まで上げておきましょう。

多少の償いとして……）」

そう言つとルカは目を閉じ、呪文を言い始めるとその瞬間、桃李の体が一瞬輝き、やがて収まった。

ルカ

「はい、これで能力が付加されました。あとは希望の武器とかある？」

桃李

「ん～、じゃ、多聞を直してくれ。絆もずっと張り替えなくともOKな状態の全身新品で

見た目はそうだな～ Beast WMD SOBに変更してくれ。念じれば大剣になるようにしてください。

あ、多聞はそれでいいよな？」

多聞

「問題ない。お前が私のマスターだ。好きにしていい。できたら私がそれに力を入れるだけだ」

ルカ

「分かりました。では、始めます」

そつと再び手を閉じ、まつぱたつになつたギターの上に手を置き、また違う呪文を唱え始めた。

するとギターが光り出し、新たな姿へと変貌した。

ギターのイメージは、" Beast WMD SOB" で検索すれば出てくると思つのでそれ参照で。

ギターの色は前と同じく青に黒い線の模様が入つている。

桃李

「おお、やつぱいにな、ほしかつたんだよな、これ」

桃李がギターに顔をつけてすりすりしていると

多聞

「喜んでいる所悪いが、私がそれに乗り移るので少し離れてくれないか？」

桃李

「え？ 力を入れるつてそういうことなのかな？」

多聞

「ああ、そのほうが対応できることがあるしな。では行くぞ」

そう言つと多聞は真言を唱え始め、次の瞬間ギターに吸い込まれた。

桃李

「なつ……」

多聞

「ふつ、これで準備は完了した。とりあえず、桃李。力の確認とすぐ技使えるように

練習するぞ」

桃李

「わかった。じゃ、試させてもらひうけだいに使っていいのル力さん？」

桃李の質問にル力は笑顔で

ル力

「はい、大丈夫です。どんどん試してみてください」

こつして桃李と多聞は力と技の使い方を試すのだった。

5時間後

桃李

「ふう。一通り試したな。後はあつちで調整するか」

多聞

「ああ、それにしても驚いたぞ。まさか5時間でここまで使いこなせるとは…。」

普通なら1日はかかるぞ?」

桃李

「俺つて天才つて事?」

多聞

「バカ者、調子に乗るな！ お前なんかまだひよつこだ。
真の奏者になるまで私がみつちり鍛えてやる」

それを聞いて桃李はうへえと嫌な顔をする。

桃李

「真剣かよ～。でも、真面目にやつとかないとまた死ぬの嫌だしな
」

ルカ

「ああ、そうでした。一つ言ひの忘れてました。
桃李さんはもう死にませんよ～。さつき不死属性も追加しどきま
したから」

それを聞いて桃李は喜ぶ。

桃李

「おお！ それは嬉しい。ならどんな攻撃を受けても死がないんだ
な？」

ルカ

「死にはしませんが、攻撃されたら傷は負うので死にそうになる攻
撃喰らうと
かなりの激痛ですよ～」

桃李

「ええええ… 真剣かよ～。まあ死がないだけマシか～」

多聞

「今度は避けるや防御の修練もしないとな」

桃李

「ああ、……さてとそれじゃ行きますかその【けいおん！】に似たセカイに」

多聞

「うむ！」

ルカ

「では、ゲート開きますね～」

そう言うとルカが地面に手をかざすと桃李たちの目の前に大きな魔方陣が現れる。

桃李

「じゃ、行つてくるね、ルカさん」

桃李は多聞の入ったケースを担ぎ、左手をスチヤつと拳げ、ゲートの中に入った。

ルカ

「いつてらっしゃーい」

ルカは微笑みながら片手を振り、桃李を見送ったのだった。

continued……

to be

第1話 「代行者は奏でし者」（後書き）

作者・桃李「といづ」とで、作者と桃李のあとト――――ク――！」

作者「こういう事で桃李も代行者となり、多聞も新たな姿で復活しました」

桃李 一次回からけいおん！のキャラとか出てくるのか？」

作曲家としての才能を發揮する。筆の靈か」

桃李一ほか、俺と多聞ども平沢姉妹と関わるのかは次回[11]期待
つて感じか?」

作者「そうなりますね」

多聞 一 それはそうとそろそろ次回予告だ、桃李」

桃李一けいおん！に似たセカイに到着した俺たちは、ある出来事をきっかけに平沢姉妹と出会う。

ウスが唯に襲いかかる！

次回 第2楽章 『奏でる鬼』 でまた会おう!」

作者「感想・ご意見お待ちしております」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7192z/>

A.O.G -Agent Of God- ~代行者は旋律を奏でし者《おに》~
2012年1月5日21時49分発行